同志社大学国文学会彙報

同志社大学の国文学専攻も十年を越す歴史を経るに至りました。この時にあたって従来の国文学会を全面的に改組して、卒業生、在学生、教員の力をあわせて、国文学、国語学、国語教育の研究をすすめ、あわせて親睦を計ることになりました。詳細は別に掲げた規約の通りです。

昭和四十年度国文学会会員

学部在学生	四五〇名
大学院在学生	一二名
学部卒業生	三五〇名
大学院卒業生	四名
教員	八名

昭和四十年度国文学会役員

会長	土橋寛
常任委員	南波浩
	小森啓助
	安永武人
	広川勝美
	八木良夫
	吉岡幸子
	上田吉晴
	松村暢夫
	太田正道
	口羽義三
	筒井利弘
	内田義
評議員	二十八名

昭和四十年度国文学会活動状況

六月二十七日　京都教育文化センター

「古典教育をめぐる諸問題」

―教材「倭建命東征」を中心として―　佐野禎治

十一月二十一日　同志社大学尋真館

「蟹報恩説話の変遷」

―蟹満寺縁起をめぐって―　黒沢幸三

「論説における近代口語文の変遷」　松下貞三

「言語教育の実際」　米谷弘子

「古典教育はなぜ必要か」　南波浩

昭和四十年度卒業論文題目

夏目漱石論

——近代社会を背景としたエゴの問題——　安藤和子
「紫式部日記」の一考察　荒木一江
佐藤春夫論
——初期の小説を中心に——　千葉博之
有島武郎論　千坂真智子
徒然草考　藤井宗一
更級日記考　八森克幸
宇治拾遺物語の説話　長谷川豊
新古今和歌集における西行ならびに西行的なものについて
——その試論——　長谷川洋右
町人物における西鶴の世界観　橋詰繁樹
能における文学上の問題　林郁子
国性爺合戦　平岡カズヨ
西鶴の町人物における人間性　堀修子
憶良の文芸性をめぐって　一場慶子
兼好の徒然草における姿勢　井戸垣匡江
芥川竜之介論
——人間として作家としての芥川——　稲田加代
芥川竜之介論
——自己変革の問題について——　伊藤訓子
「徒然草」の中の兼好　梶原千代枝
永井荷風論
——小説と批評家と——　糸井満里子
近松の心中物　抱多恵子
「今昔物語集」の文学性について　掛樋久仁子
平家物語の構想　紙本節代
「世間胸算用」の文体　河田洽子
近世社会に於ける義理と
近松の文学にあらわれた義理　菅野克実
伝承竹取説話から
現存竹取物語への道すじについて　木口加寿子
石川達三論
——その自己変革の過程について——　喜多山敦子
蜻蛉日記論　北野晶子
徒然草における思性の発展
——その無常観を中心に——　小島和子
万葉集相聞抒情
——巻二「相聞」の実質が意味するもの——　駒木敏
西鶴町人物における一考察　小財光宏

近松の世話悲劇における義理・人情　熊本恭子
「平家物語」と仏教　黒瀬正敏
夏目漱石
——「それから」から「門」への屈折——　松本美智子
石川達三文学への一考察　松村典子
樋口一葉論　松尾佳代子
「和泉式部日記」論　森岡千種
西鶴論
——俳諧師そして草子作家西鶴——　中川佳子
説話的発想方法と今昔物語集　中井靖久
有島武郎における自我確立の方向　中村幸子
新古今和歌集の特質について　中野鍈子
樋口一葉論　中安美智子
平家物語の附加説話について　西村功
上田秋成論
——その小説分野に於ける活躍を中心に——　野田真喜子
石原慎太郎論　野田俊太郎
「平家物語」にみる清盛　野木道子

平家物語の本質　越智寛子
西行の人生観　奥田美奈子
近松の描いた元禄の女　奥村良子
宮本百合子論
——「伸子」を中心にして——　大槻勝子
伊勢物語の本質
——その人間像について——　佐野禎治
藤原定家に於る歌風の変化
——新古今和歌を中心に——　下沢美世子
田宮文学への一考察
——日本の近代化の認識と国家権力への憎しみ——　橘紀代子
世阿弥の能楽創造　竹下敬子
続古今集の基礎的研究　谷山悦子
三島由紀夫論
——三島における青春の解剖——　多谷なづみ
中世の隠者の系譜
西行・長明・兼好　徳地庸子
樋口一葉論　植田照代
人麻呂挽歌について　上田吉晴

堀田善衛論
——戦争体験の追及——　梅原輝之
定家に於る妖艶　氏本伊佐子
新美南吉論　和田昭子
源氏物語の子ども観、幼児描写の文芸的意義　渡辺昌子
更級日記論　山川智子
正宗白鳥論
——宗教と文学の関係から自然主義文学における白鳥の位置——　山弘本之
新古今集に於ける思想と文体　米内弘子
能楽における中世的詩の方法の達成　米田喜美子
更級日記研究
——その浪漫的精神を中心に——　吉岐泰子
大江健三郎概略　坂本米子
室生犀星論　山崎省三
平家物語考　赤沢和夫
宮本百合子の文学の特性　五江淵洋子
中原中也論　古林健司
恋歌の発生及び上代歌謡に於ける恋歌の抒情性について　藤井徹也

梁塵秘抄の二面性格　神原英樹
野間宏論
——エゴからの出発——　北藤五郎
梶井基次郎論　寺田千里
開高健論
——集団の文学——　竹中清一郎
太宰治論　辻忠宏
児童文学論　奥田継夫
宮沢賢治論
——グスコーブドリの伝記を中心に——　大野雅子
平家物語とその登場人物　森本昇
武者小路実篤論
——「新しき村」運動展開までにみる〝自我〟追求のあり方を中心として——　山本雄吾
新聞報道の文章とテレビニュースのアナウンスについて　堤雄二
庶民文学とお伽草子　浅野洋子
「かげろう日記」の文学史的意義　橋本静子
中世文学近世文学に与える平家物語の影響について　三井永明

中世に於る民衆文学の真意
——コキリコ踊を中心に——　宮角　瞳
つれづれ草
狂言への一考察
——大名狂言を中心にして——　森日出子
好色五人女　村上弘光
世阿弥について　西野伸
好色五人女　小川政昭
歌垣と民謡の社会性　東郷健
好色五人女考察　福田徳昭
泉鏡花論
——「鏡花ロマン」の特質について——　中嶋淳一
「長恨歌」と「桐壺」巻　石本忠義
繁村勝利

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んで御投稿下さい。枚数は四百字原稿用紙三十枚〜四十枚。第二号〆切は八月二十日。ただし掲載論文の数には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任して下さい。

同志社大学国文学会会則

第一章　総　則

第一条　本会は同志社大学国文学会と称する。

第二条　本会は国文学・国語学及び国語教育の研究を目的とする。

第三条　本会の会員は同志社大学国文学専攻に属する左記のものとする。

1　専任教員
2　学部在学生
3　大学院在学生
4　学部卒業生
5　大学院卒業生

但し、特に入会を希望し、評議員会の認めたものは会員になることができる。

第四条　本会の事務所を同志社大学文学部国文学研究室におく。

第二章　事　業

第五条　本会の第二条の目的を達成するために左記の事業を行う。

1　研究会の開催
2　講演会の開催